

論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第 8 条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

○氏名	LIU Wenjuan (りゅう ぶんえん)
○学位の種類	博士 (文学)
○授与番号	甲 第 1162 号
○授与年月日	2017 年 3 月 31 日
○学位授与の要件	本学学位規程第 18 条第 1 項 学位規則第 4 条第 1 項
○学位論文の題名	川端康成〈掌の小説〉論 一戦前から戦後にかけて一
○審査委員	(主査) 瀧本 和成 (立命館大学文学部教授) 花崎 育代 (立命館大学文学部教授) 田口 道昭 (立命館大学文学部教授)

<論文の内容の要旨>

劉文娟氏の本論文は、学位論文題名に示されているように川端康成〈掌の小説〉に関する研究を5章立てで分析、考察したものである。川端康成が戦前の1934(昭和9)年から戦後の1952(昭和27)年にかけて執筆した〈掌の小説〉群は、従来川端康成文学研究に於いて作家論的見地からのアプローチはあったものの作品を緻密に分析・考察されて来なかった経緯がある。本論は、そうした先行研究の現状を踏まえ代表的な作品10小説を抽出し、各作品を人物形象、作品構成等を丁寧に分析し、時代・社会状況を視野に入れ、作品主題と作者の意図を明らかにしたものである。そうした考察を経て、全体としての〈掌の小説〉の意味や意義、ひいては川端文学作品の中での位置づけや評価を定めることに努めているところが当論考の特徴である。

論文構成(目次)は、以下の通りである。

序

第1章「令嬢日記」、「ざくろ」論

第1節「令嬢日記」／第2節「ざくろ」

第2章「十七歳」、「小切」論

第1節「十七歳」-妹の悲しみの内実-／第2節「小切」

第3章「さと」、「水」論

第1節「覆面文藝」として発表された両作品／第2節「さと」／第3節「水」／第4節両作品の成立背景

第4章「五拾銭銀貨」、「さざん花」、「笹舟」論

第1節「五拾銭銀貨」／第2節戦後に残された心の傷痕

第5章

「明月」論—〈死〉から〈不死〉へ

第1節「私」について／第2節兎の絵／第3節不死の象徴／第4節アメリカ人—戦後の世相

結

註

引用文献

参考文献

作品別異同一覧表

後記

(全 149 ページ)

上述の通り、川端康成が戦前の1934(昭和9)年から戦後の1952(昭和27)年にかけて執筆した〈掌の小説〉10作品を研究したものである。

第1章では、「令嬢日記」と「ざくろ」を取り上げ、分析・考察している。「令嬢日記」については、不安定な時代と経済不況下にある老会社員の家庭の娘・朝子の生活ぶり及び朝子の視点から見た同窓達の生き方に注目し、現実生活に溶け込めずに時代状況から遊離している朝子の人物像を捉え、作品の主題を明確に提示したうえで、暗い時代をいかに生きるかという作者の問い(意図)に迫ろうとしている。また、「ざくろ」論では主人公きみ子の感性によって支配されているきみ子の内的世界を分析し、その心境を丁寧に読み取っている。そして作品における母の両義的な役割や小説の全編を貫いてきた「ざくろの実」の象徴的な意味を明らかにしている。

第2章では小説「十七歳」、「小切」を取り上げて論究している。作品「十七歳」では、妹に焦点を当ててその妹の悲しみの内実を時代背景を視野に入れて明らかにしている。作品「小切」論は、題目である〈小切〉によって照らし出される銃後の現状や主人公美也子の心の両面を指摘し、作者の意図と関わってその繊細な心の変化を漏らすことなく読み取っている。そして、大沢中尉との縁談を拒否して個人の小さな幸福を全うしたいと考える美也子の姿を浮き彫りにしている。さらに、「新女苑」の入選作と選評を手掛かりに、作者の「小切」に込められている銃後の女性への温情を見出し、意味づけている。

第3章では、小説「さと」、「水」の両作品を対象にして論じている。作品「さと」に関しては、実家に戻った時に思い出した4年前の嫂の里帰りの情景や現在の嫂の姿から、その変化を感じ取って「はつと」する主人公絹子の内面を緻密に考察している。作品「水」論では、〈水〉に対する若い妻の気持ちに仮託して表現された「満州」にいる嫁の郷愁を解説し、慣れない気候風土に苦労しつつ「母国」を恋しく思いながらも、夫と「満洲」で暮らしていこうとする強い意志と優しい心を持つ妻の姿を明らかにしている。そうした各作品の主題を明確に提示しつつ、両作品の成立背景を視野に入れながら、当時の戦争状況下の作者の姿勢について考察を加えている。

第4章に於いては、戦後作品に当たる「五拾銭銀貨」、「さざん花」と「笹舟」を取り上げて論述している。小説「五拾銭銀貨」では、特売場の「空気」に釣り込まれ、安い洋傘を買うために内心の葛藤を経て結局諦めるに至った母の心理的变化の過程や戦後廃墟になった街を目にして人間の営

みの本質を問う芳子の心境の在処を読み取っている。「さざん花」、「笹舟」論に関しては、それぞれ異なる境遇から戦後に新しい生き方を見出せない主人公の形象から、戦中と戦後の分水嶺で新時代との乖離や敗戦後の喪失感を通して「生」のあり方を問う作者の視点を見出している。

第5章では、「私」である月子の形象に注目し、作品「明月」を「思ひ出」という観点から考察している。作品内で交錯する様々な素材の象徴的な意味を把握したうえで、これらの素材がいかにか有機的に結び付けられ、月子の思い出の中に存在するかが説得力のある読みとして提出され、さらに「私」の〈不死〉の「生」というテーマに統合されていくのかを見事に論証している。

結章では、これまでの分析・考察を踏まえて戦前から戦後までの〈掌の小説〉群の特質を明らかにし、作者川端康成の内面をどのように照射しているかを探求している。川端の戦前から戦後までの〈掌の小説〉は、戦前社会の閉塞的なものあるいは戦時下の生活者が抱く違和感・抵抗感を根底に潜め、異常な世相を背景とした人間の姿を描出している。理想と現実の両極を往来する戦中から、敗戦後の世相との厭離の中で〈死〉に逆らう〈生〉を描く創作へと軸を移す過程において、自らの芸術観を織り交ぜて表現する作者の文学的営為を窺わせる。様々な技法で彩られた初期に比べて、生活の断片を写實的に描かれたものが多いが、短い作に暗示・象徴的な表現が意識的に織り込まれ、重層的で深さのある文学世界が構築されており、他の時期の川端文学とは違った精彩を放っている作品群であると結論づけている。

第1章から第3章までは日中戦争直前から太平洋戦争末期までの〈掌の小説〉六篇を取り上げて論じている。これらの作品はいずれも戦前・戦中の日常を素材としており、その日常の中に当時の人間の生活の実態、特に若い女性である主人公達の哀歎が描出されている。この時期の〈掌の小説〉は、現実的な制約や束縛から抜け出して本来のままの姿で現在を生きようとする純粋な魂の強さと、心のひたむきさと、時代・社会の現実の中で数々の抑制を受けずにいられない人間のやるせなさや弱さといった両極を往来している。新感覚派から出発した作家の「現実」との対峙がそこにある。その間に漂う悲しさ、美しさ、憧れと祈りを川端文学の主要な色合いと見ることができると結論づけている。戦時下の川端について「結局、小さな個人がとやかく言ってもどうにもならぬような歴史の流れの中で、その中に流される一つ一つの可憐な命に、ただじっと悲しみの目を注ぐ、といった程度の所に、自分の作家的力を発揮する以外なかった」と言われている。しかし、単に日常の中の人間の哀歎だけを川端は書いていたのではない。戦中の作品「ざくろ」、「十七歳」、「小切」、「さと」、「水」には作者の戦争に対する思いが込められ、戦時下の人間を見つめる暖かい目も隠されている。川端は「ざくろ」において、きみ子の内的世界で恋人との愛を成就させたが、現実生活に立脚した無頓着な母や戦場へ赴く啓吉を登場させ、それを打ち砕く存在として現実を強く意識させている。小説は啓吉の死を予感させる「恐ろしさ」で閉じられ、戦争に関する直接的な描写が見られないが、大きく死の影を落としている。そして、「十七歳」の妹の「成長」過程には戦時下の社会状況から一步踏み外したところで生まれた悲しみの心情が通底している。また、「さと」の絹子は嫂の後ろ姿を見て「はつと」した瞬間、目の前の幸福が消え失せ、銃後の女性の逃れられない運命に気づいたのである。川端が戦争を如何に重く受け止めていることは上述のようなところから確認できる。戦時下の「現在」に同調しない違和感を川端は作品において繊細に表現している。そのような作者

の違和感・抵抗感は、第四章で論じた戦後の作品「五拾銭銀貨」にも貫いている。さらに「水」で論じてきたように、戦争末期では「時勢に反抗する皮肉」の意味合いが込められていたことを指摘。一方、このような人間本来の「常」が奪われ、個人の感情が抹殺されている時代を如何に生き抜くか、川端は「生」へ向かって「現在」を生きるべきだという思いを「十七歳」において「鉛筆の心」を抱えて一心に運んでいる「蟻」に共感を寄せて書き込め、人間性の抑圧の中にあっても小さな幸福を全うすべきだと時局に逆らっているが、銃後の女性に温もりと力を与える「小切」一編を記したのである。

戦後「日本の美」を表現した作品などは川端文学の一つの大きな流れとなっている。その「日本の美」とされるものの芽生えは戦中の時期にある。1943(昭和18)年7月20日から「満州日日新聞」に連載された小説「東海道」では、川端は「もののあはれ」や「たをやめぶり」の平安朝文化が日本の美を生み出したものとして捉え、そのような文化が「弱いものではなく」、「男の唐崇拝を笑つて」「民族の自覚」を促す女達の強さを含んでいと書いている。そして、「平家、源氏、北條、足利、徳川が滅んだ後も、王朝文化の中心である「源氏物語」が「なお生き抜いてゆく」のだと言っている。「源氏物語」の持つ優しさや夢、王朝文化の含む「みやびの精神」は一見柔弱そうに見えるが、支配・抑制を溶解させる強さがある、といった意味の内容だと理解できる。そのような「たをやめぶり」という優雅・美は「長い内乱の荒廃のなかに生きた人の心」の支えになってきたと考えられている。そうした作者の美意識は戦中の作品「小切」において、「古切」に見る今の時代を耐え抜く「日本の美」——「みやび」に力を感じ、「新鮮な愛情」が湧いてくる美也子の形象に表されている。また、戦後の作品「五拾銭銀貨」などにも影響を及ぼし、そして敗戦の荒廃を経て、日本の伝統美を継承していく軌跡へと繋がっていくと分析している。第4章と第5章で取り上げた敗戦直後から米軍占領が終了した年までの4作品は、戦後の一時期の世相がよく反映され、転換期における作者の心境が映し出されている。第4章の「さざん花」、「笹舟」両作品は、敗戦直後の世相や時代の変化を背景とした人間の心の有り様を描き、敗戦とともに滅びた主人公の「生」を窺わせる。また、第5章の「明月」は主人公の〈死〉に逆らう〈生〉の永遠性への希求が描出されている。それは、自分の命を〈生〉ならぬ「余生」とし、死後の〈生〉を生きているという心境を「島木健作追悼」(1945.11)「横光利一弔辞」(1948.2)などの友人の弔辞や「哀愁」(1947.10)、「独影自命」(1948.5)、「反橋」(1948.10)、「天授の子」(1950.2)などの作品で繰り返して述べている作者と呼応している。敗戦後、友人知己の死、日本という国家の〈死〉と川端自身の〈死〉が奇妙に重ねあわされ、戦争の傷痕が敗戦の悲しみとともに作者の内面深くに染み込んでいる。そうした中で、川端は「日本の美の伝統を継がう」という自覚と願望を固め、〈美〉に癒しと支えを求めていく。それが戦後の〈掌の小説〉群にも深く投影されている。「五拾銭銀貨」では、空襲の後に残った硝子の文鎮に美的なものの不滅が仮託され、「明月」では、形を超えて伝統美を代表する宗達の「月の絵」が媒体になることで、月子の思い出の中に「私」の〈不死〉が実現されている。戦後に死後の〈生〉を逆説的に生きることになった川端にとって、美的なもの(美術品・古美術)が自らを生の世界へと繋ぎ止める結い目をなしている存在だと言える。1940から50年代における川端の文学作品にしばしば登場する古美術は、「作中人物たち

の関係性を駆動させる動因をなすのみならず、彼らの生と死、そして再生を左右しさえするモチーフとなってもいる」のである。

このように4作品は、戦中と戦後の分水嶺における作者の内面が露呈し、同時期の他の作品と響き合いながら戦後の川端文学の基色となっていくのである。第二次世界大戦を挟んだ激動の時代の「波立ち」が感じられる戦前から戦後までの〈掌の小説〉は、戦前社会の閉塞的なものあるいは戦時下の生活者が持つ違和感・抵抗感を根底に潜め、異常な世相を背景とした人間の姿を描出している。理想と現実の両極を往来する戦中から敗戦後の世相との厭離の中で〈死〉に逆らう〈生〉を描く創作へと軸を移す過程において、自らの芸術観を織り交せていく作者の文学的営為を窺わせる。様々な技法で彩られた初期に比べて、生活の断片を写實的に描かれたものが多いが、短い作に暗示・象徴的な表現が意識的に織り込まれ、重層的で深さのある文学世界が構築されており、他の時期の川端文学と違った精彩を放っている作品群として特徴づけている。そのうえで〈掌の小説〉は、川端文学の精髓を簡潔で含蓄かつ感覚的に表明し、同時に〈愛〉と〈美〉と〈死〉を作家独自の色合いで描出し得た作品群として、日本近代文学の中に確かな位置を占めていると結論づけている。

< 論文審査の結果の要旨 >

審査には主査瀧本和成、副査花崎育代教授、副査田口道昭教授の3名が当たった。

本論文は、上述の通り1934年から1952年に至る川端康成の〈掌の小説〉作品を主人公の形象を中心に時代背景を視野に入れて、心境の変化や繊細な心の有り様を両義性を含んだ表現技法から緻密に読み解こうとした論考である。10作品それぞれ丁寧に分析し、作品の主題を解明し、作者の意図に迫っている点は高く評価された。また、作品それぞれの特質だけでなく、〈掌の小説〉群に共通するテーマや内在する美的感覚なども抽出し、連続した形で捉ええたこともこれまでの川端文学研究には見られなかった点として評価された。加えて、時代背景や社会状況を各々描出される作品に照らして資料を提出しつつ分析し、考察した点もこれまでにない精緻な考察として特筆されると考える。

今後の課題としては、本論考では論じることができなかった同時期に発表された作品「紅梅」、「足袋」、「かけす」、「夏と冬」、「卵」、「滝」、「蛇」などの掌編や1960年代から作者晩年までのいわゆる「第三期」の掌の小説にも目を向けて、同時期の他の作品との繋がりの中で分析・考察し、戦後における川端文学の全体像を把握することが肝要かと考える。

しかしながら、それらの課題点は聊かも論全体を損なうものではなく、本論考が創意に満ちた優れた博士論文として高い水準にあることは、審査委員の一致した意見であった。

以上、公聴会と論文審査の議論により、審査委員会は本論文が博士学位を授与するに相応しい水準に達しているという判断で一致した。

< 試験または学力確認の結果の要旨 >

本論文の公開審査は2017年1月14日10時00分から12時00分まで、末川記念会館2階

第 2 会議室にて行った。審査委員会は、本学大学院文学研究科人文学専攻博士課程後期課程の在学期間中における学会発表などの様々な研究活動、また公開審査の質疑応答を通して博士学位に相応しい能力を有することを確認した。

以上、論文審査、公開審査での結果を踏まえ、本論文が博士の学位に値することについて意見は一致した。審査委員会は申請者に対して、本学学位規程第 18 条第 1 項に基づいて、「博士(文学立命館大学)」の学位を授与することが適当であると判断する。